



「視点シフト」といわゆる「非飽和名詞」

著者	西垣内 泰介
雑誌名	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス
巻	21
ページ	151-169
発行年	2018-03-05
URL	http://doi.org/10.14946/00002026

「視点シフト」といわゆる「非飽和名詞」*

西垣内 泰介

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所
gauchi[at]shoin.ac.jp

On point-of-view shift

Taisuke Nishigauchi

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本論文では Sells (LI 18, 1987) のいわゆる「主観表現」に関わる分析に関連し、Nishigauchi (JEAL 23, 2014) による「視点投射」(POV-projections) を含む統語構造の観点からの分析を提示する。本論文の分析では下位の視点投射が上位の視点投射の位置へ主要部移動し、それによって下位の視点投射の「一致」領域が広がることによって捉えられる言語現象を示す。さらに、「理由」「原因」という従来「非飽和名詞」と呼ばれているものを含む構文の中で見られる「視点」現象を考察し、「理由」「原因」などを「関係を表す名詞」と考えることで、まったく次元の異なる分析の展望が開けることを示す。

The present article discusses the nature of 'Point-of-view-sensitive' expressions in light of the analysis making crucial use of the Point-of-View (POV) projections, extending the analytical framework presented in Nishigauchi (JEAL 23, 2014). The POV-sensitive elements, along with zibun, come into Agreement with one of the POV-projections, projecting pro in the respective SpecPOVP. The effect of the Logophoric Hierarchy will be captured by proposing head-movement within the POV-domain, whereby broadening the domain of Agreement involving the relevant POV-head. This paper also considers the problems related with POV-phenomena observed in constructions involving what has been (erroneously) termed 'unsaturated nouns'.

*題名で「非飽和名詞」という用語を用いているが、これはこの語が過去数十年にわたって日本語学で定着してしまっているためであり、あくまで「いわゆる非飽和名詞」である。この概念の問題点を指摘することが本論文のひとつの目的である。本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「「視点」とモダリティの言語現象—「意識」、エンバシー、阻止効果—」(2014 年度～2017 年度、研究代表者: 西垣内 泰介、課題番号: 26370468) および 基盤研究 (C) 「モダリティと視点に関わる言語現象と統語構造の多層性」(2016 年度～2019 年度、研究代表者: 遠藤 喜雄、課題番号: 16K02639) による援助を受けている。

キーワード: 視点、一致、非飽和名詞、連結性、「自分」、証拠性

Key Words: point-of-view-sensitive expressions, unsaturated nouns, connectivity, *zibun*, evidentiality

1. はじめに

この論文では、Charnavel and Zlogar (2015), Sells (1987) などで研究されてきた「視点」に関連する言語現象を Nishigauchi (2014a), 西垣内 (2014b) で提示した「視点投射」に基づく分析方法によって再定式化していく。この「再定式化」は、表示のしかたのヴァリエーションにとどまるものではない。

Charnavel and Zlogar (2015), Sells (1987) に共通しているのは、視点表現に関与する項に「情報源」などのラベルをつけるというものである。しかし、この方法では、あるラベルが適用する範囲が広すぎるのでこれを分割しなければいけないなどの、この種の方法に内包される問題がある。

この論文では、この「ラベル」に相当する概念が「視点投射」を含む構造の中でそれぞれの投射指定部の *pro* のコントローラとして捉えられる。これは単に「視点投射」の数だけ「ラベル」を設定するということとは違う意味を持っている。なぜなら、「視点投射」主要部が上位の投射の位置に移動することによって派生の過程でより多様な構造が生み出されることがあるからである。本論文では、そのような具体的なケースを示していく。

また、この論文では、西垣内 (2016) で検討した次の文に見られる「視点」に関連する微妙な対比について考察を続ける。

- (1) a. 大学の不可解な人事が 鈴木教授が辞職した (こと) の理由だ。
- b. 大学の不可解な人事が 鈴木教授が辞職した (こと) の原因だ。

これらの文の「不可解」が、誰の視点から見て不可解であるかという対比がある。(1a)の「不可解」は「鈴木教授」の視点から不可解であり、(1b)の「不可解」は、「鈴木教授」の視点よりも、この文を発話した人、つまり(外的)話者の観点を表す解釈が支配的である。

「理由」「原因」とともに西山 (2003) よって「非飽和名詞」と呼ばれているものである。これらを「非飽和名詞」と分類するだけでは、(1ab)の間の視点に問う対比は考察の視界にも入らない問題である。しかし、西垣内 (2016) のようにこれらの名詞の本質をさまざまな意味タイプで表される表現を2項としてとることと考えると、どのようなタイプの表現が関与するのかという方向に思考が進んで行く。5節で、この問題を「視点」に関するケース・スタディとして展開していく。

2. 視点表現と視点シフト

2.1. 視点表現

本研究で対象とする「視点表現」(Point-of-View sensitive expressions)とは、Bylinina, McCready and Sudo (2014): 田窪 (2010) などで列挙されている次のような言語表現である。

(2) 視点表現

- ダイクシスに関わる表現
 - 相対的位置・関係を表す表現: 右, 左, 前, 後ろ, など; 同僚, 先輩, 家族, 外国人 など
 - 直示表現: 私, きみ, こ・そ・あ系列 など
- 視点に依存する照応形: 「自分」
- 主観的評価を表す表現
 - 不確定な評価表現: 大きい, 高い, 広い, 美しい, 優秀な など
 - 個人的見解を表す表現: おもしろい, 楽しい, おいしい, 不可解 など
- 証拠性, 評価などを表す (助) 動詞: ~そうだ, ~てしまう など
- 呼称・敬称: 田中さん, 田中くん, 田中先生 など; バカ, 慌て者 など

これらの表現は, 単文で用いられる場合は話者の視点を表す。

(3) 左の男が立ち上がった。

この文で, 立ち上がったのは話者から見て左にいる男である。しかし, この文が従属節として用いられると, 「左」の意味に違いがでる。

(4) タカシは左の男が立ち上がるのを見た。

この文では立ち上がったのは話者から見て左の男であるか, 主節の主語である「タカシ」から見て左の男であるか, 2つの解釈がありうる。(実際にはもうひとつ, 「タカシの左」で, これはむしろ話者の視点を表すと思われる解釈があるが, これについては後の節で議論する。) このように, 文脈による視点に意味の変化を「視点シフト」 **POV-Shift** と呼ぶ。

これがほんとうに言語学的に有意義な「左」の意味の「変化」と言えるのかについては検証の必要がある。(4) が単に「左」の意味の不確定なあいまいさ (vagueness) を表しているにすぎないかも知れないのである。この点を見るために使われるのが, 削除ないし省略を含む文である。次のように, 述部の削除を含む文を, タカシとマリが向かい合って座っているという文脈で考えてみよう。

(5) タカシは左の男が立ち上がるのを見た。マリも見た。

タカシから見て左の場合, マリが見たのはマリ (自分) から見て左の男とタカシから見て左の男の両方の読みが可能である。これだけ見ると, 「左」の意味は単に不確定と見えるかも知れない。しかし, タカシが見たのが話者から見て左の男である場合は, マリが見たのも話者から見て左の男でなければならない。

タカシから見て左の男である場合に2つの解釈の可能性があるのは, マリが見たのがタカシから見て左の男である場合は指示の同一性 (identity of reference) が関わっている場合であり, マリ (自分) から見て左である場合は, ふたりの登場人物のそれぞれの視点が前面に出ている場合と考えられる。これは「視点の同一性」 (identity of perspective) と言えるものであり, 「視点」が文の真偽値を決定する上で関与する要因であることを示している。

2.2. Shift-Together

Bylinina, McCready and Sudo (2014) は、複数の視点表現が従属節に現れる場合、「シフトの一貫性」(**Shift-Together**) と言える制約があることを述べている。

(6) Wei said that a foreigner sitting on the left stood up.

この文には多義性があるが、関与する表現はともに話者の視点を表すか、Wei の視点を表すかのいずれかである。これは「視点の一貫性」(久野 1978) に通ずる、自然な観察である。しかし、次のような例を考えてみよう。

(7) While the big man sitting behind was talking loud, Wei was fast asleep.

この文の相対的位置関係を表す **behind** は話者の視点、Wei の視点のいずれかを表す可能性があるが、主観的な評価を表す **big, loud** は話者の視点ないし評価を表すと考えるのが自然である。

2.3. 談話役割

Sells (1987) は、言語の視点にかかわる現象を説明するために次の3つの談話役割 (discourse roles) に言及することが必要であるとしている。

(8) 伝達源 (**source**): 伝達の意図的行為者

自己 (**self**): 命題内容がその心理状態・態度を記述する人

基準 (**pivot**): その(時空に関わる)位置に関して命題内容が評価される人

この観点からすれば、(6) で **Shift-Together** が成り立っているのは、関与する視点表現がともに「相対的位置・関係を表す」、(8) の「基準」に指向する表現であることによる。(7) では **behind** が「基準」指向であるのに対し、**big, loud** は「自己」指向である。この文の Wei は眠っていて、**while** で始まる節が表す状況について認識していないと考えられる。従って、Wei の談話役割は「基準」である。Wei は **behind** の「基準」になることはできるが、「自己」指向の表現の視点保持者になることはできない。文中の登場人物に「自己」の役割を持つものがないので、この文を発話した話者がその役割を持って、**big, loud** の視点保持者となる。

次に、この文を考えてみよう。

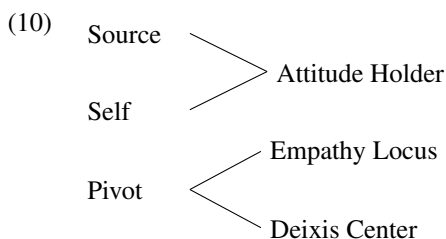
(9) That the big man sitting behind was talking loud intimidated Wei.

この文に出てくる Wei は経験者 (Experiencer) の θ 役割を持っており、(8) の「自己」の談話役割を持っていると考えられる。従って、**big, loud** は Wei の視点を表すことになる。「基準」指向と考えられる **behind** が Wei の視点を表すと解釈できるのは、Sells (1987) によると (8) の3つの談話役割は階層をなしており、この階層で上位の談話役割は下位の談話役割が本来なるべき視点保持者となれる、つまり「自己」である Wei は「自己」指向の **loud** だけでなく (8) の階層の下位である「基準」指向の **behind** の視点保持者となれることになる。

2.4. 「基準」の分割

(7) と (9) では behind の意味が微妙に違っている。(7) では Wei がまさに位置関係の「基準」であり, behind は「Wei の」後ろであるが, (9) では behind は「Wei から見て後ろ」であり, 後者では Wei の視点が関わっているのに対して, 前者ではむしろ話者の視点を表していると考えられる。

Charnavel and Zlogar (2015) は Sells (1987) の談話役割を次のように再定式化することを提案している。



これによると, 「情報源」と「自己」をまとめて「態度保持者」(Attitude Holder) とし, 「基準」を「エンパシー拠点」(Empathy Locus, EL) と「ダイクシス中心点」(Deixis Center, DC) に分割することになる。

Charnavel and Zlogar (2015) は EL を次のように定義している。

- (11) **Empathy Locus:** the event participant that the speaker identifies with, or empathizes with (i.e. takes the mental perspective of). (Charnavel and Zlogar 2015, (22))

Charnavel and Zlogar (2015) が EL を例示するためにあげている例がすべて適切とは言えないが, Zribi-Hertz (1989) から再引用している次の例は的確にこの概念を例示している。

- (12) He_i sat down at the desk and opened the drawers. In the top right-hand one was an envelope addressed to himself_i. (cited in Zribi-Hertz 1989, 716)

2 番目の文は 1 番目の文の主語 he の視点を表しており, he が EL と認定されることで再帰照応形の先行詞となることができる。

(9) に見られる behind は Wei が EL と認定されて Wei から見て後ろを表していると考えられる。話者が Wei と視点を共有しているという解釈である。

Sells (1987) の枠組みでは Pivot と見なされているが, Charnavel and Zlogar (2015) が EL と区別すべきと主張しているのが, Deictic Center (DC) である。これを Charnavel and Zlogar (2015) は「空間的, より特定のには認識的な中心点」と特徴づけ, これに関与するものとして英語の前置詞, 移動を現す動詞 (come / go) としている (Charnavel and Zlogar 2015, sec. 3.3)。Charnavel and Zlogar (2015) は DC の性質を例示するものとして次の Sells (1987) からの例文を引用している。

- (13) a. He_i was happy when his_i own mother came to visit him in the hospital.
 b. ??He_i was happy when his_i own mother went to visit him in the hospital. (Sells 1987, 465)

Charnavel and Zlogar (2015) は come の指示点 (reference point) が着点 (Goal) であるのに対し、go の指示点は Goal 以外である、という一般化を提出している。しかし、DC には「認識的」な要素はないと考えるのが正しいと思われる。次の文のように、死亡していて意識がない人も DC と考えられる。

- (14) He_i was already dead when his_i own mother came to visit him in the hospital.

次の2枚の写真の猫 Zazie は (15) では代名詞 her の先行詞となる場合は DC, 再帰照応形 herself の先行詞となる場合は EL と考えられる一方, (16) では代名詞 her のみが可能で, DC と解釈される。



- (15) Zazie_i is lying on the floor, with her_i bed behind {herself_i / her_i}.
- (16) Zazie_i is facing away from me, with the heater behind {*herself_i / her_i}.

Charnavel and Zlogar (2015) の一般化に反することになるが, DC は英語の再帰照応形の先行詞とはなれないと考えるのが正しいと思われる。

もう一度, 上の問題文を見てみよう。

- (7) While the **big** man sitting **behind** was talking **loud**, Wei was fast asleep.
- (9) That the **big** man sitting **behind** was talking **loud** intimidated Wei.

(9) では behind が Wei の視点を表しており, Wei 「から見て後ろ」で, Wei は EL である。(7) では, Wei の意識も視点も関係なく, Wei はあくまで空間的関係の基準であり, DC である。ここでの behind は「Wei の後ろ」である。

DC は英語の再帰照応形の先行詞になれないことを見たが, Nishigauchi (2014a): 西垣内 (2014b) で観察しているように, 日本語の「自分」は DC を先行詞とすることができる。

- (17) a. *先生が自分_iをほめたとき, タカシ_iはぐっすり眠っていた。
 b. 先生が自分_iを呼びにきたとき, タカシ_iはぐっすり眠っていた。

(17a)では「自分」の先行詞となろうとするタカシが眠っていて、「自分」を含むできごとを意識してないので、「有意識条件」を満たしておらず同一指標の解釈は得られないが、(17b)では移動を表す(助)動詞「く(る)」が使われており、タカシをDCと読むことができることが与えられた同一指標を可能にしている。

2.5. 「情報源」?

Charnavel and Zlogar (2015)の「基準」をELとDCに分割する提案は支持する根拠がありそうだ。では、「情報源」と「自己」をAttitude Holder(態度保持者, AH)にまとめる提案についてはどうだろう。

このことを考えるため、次の文を見てみよう。

(18) That the jerk sitting behind was talking loud intimidated Wei.

この文のbehind, loudはWeiまたは話者の視点を表すと考えることができるが、最初に出てくる視点表現the jerkは話者(のみ)の視点を表す。このような非難を表す呼称を使うことがひとつの言語行為(speech act)であり、(8)の「伝達源」指向の表現と考えられる。しかし、文中の登場人物には「伝達源」の談話役割をになうものがない。この文の発話をした話者が「伝達源」と認定され、the jerkは話者の視点を表すと考えるのが妥当である。

また、ロゴフォーの先行詞として発言動詞の主語など「情報源」の談話役割を持つ項のみを許す言語がある(Sells 1987, etc.)ことなどが知られており、「情報源」と「自己」を一つにまとめてしまうのは経験的事実の記述において妥当性を欠くと思われる。

2.6. 「自己」の分割?

しかし、Sells (1987), Charnavel and Zlogar (2015)で行われているように視点保持者について「自己」などのラベル付けをすること自体意味がないのではないかと思わせる現象がある。

(19) 警察が 不可解にも 自分_i を見つけ出し そう なことが犯人_iをいら立たせている。

この文の「自分」の先行詞を「犯人」とすると、証拠性を表す「～そう」も「犯人」の視点を表しているという解釈が支配的である。一方、「不可解」は「犯人」の視点を表す読みが支配的ではあるが、話者の視点を表す解釈も不可能ではない。

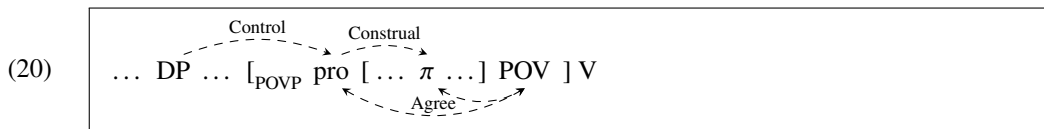
「不可解」が話者の視点を表す場合、談話役割としては話者が「自己」である。しかし、上に仮定した解釈では「～そう」については「犯人」が「自己」であり、ひとつの文の解釈の中に2人の「自己」が関与していることになる。

それ以上に問題となると思われるのが、談話役割のラベル付けでは(19)の「～そう」は「犯人」の視点を表すという解釈が支配的で、話者の視点を表す解釈はないことを予測することができないということである。

3. 視点投射

Nishigauchi (2014a), 西垣内 (2014b) は「証拠性」(evidentiality) 「評価」(evaluation) 「伝聞」(hearsay) などの意味のないし語用論的な意味概念をエンコードする統語範疇が節を構成する要素として存在すると考える Speas (2004) に従って、これらのモーダル要素はそれぞれ個別の投射を形成し、言語によってはこれらの(総称的な呼び名としての)視点投射 (**POV projection**) が多層構造をなすと考え、そのような理論的・分析的枠組みで主に日本語の「自分」の長距離束縛と呼ばれる現象に関わるさまざまな現象を考察してきた。

西垣内 (2014b) では、「一致」(**Agreement**) という概念を積極的に用いて視点現象の分析を進めている。この分析では、「自分」は視点表現の一種と考え、視点投射主要部と POV 素性を共有することで「一致」(Agreement) の関係を持つと考える。さらに視点投射指定部に現れる要素(視点保持者)も視点投射主要部と「一致」(Spec-Head Agreement) の関係を持つ。POV 指定部に pro があれば、これが文中の名詞句によるコントロールを受け、「自分」の「長距離束縛」といわれるものが可能となる。



本論文では、この考えをさらにすすめ、(20)の π の位置に(2)に列挙した視点表現が現れると考える。「自分」はPOV投射のいずれとも「一致」の関係を持てるが、(2)の「自分」以外の各項目はPOV投射のいずれかと選択的に「一致」する。

ここで働くコントロールは、次のストラテジーによって解決される。

(21) 「意識性の pro」は「意識焦点」(Sentient Focus, SF)を探す。

「基準の pro」は「視点焦点」(Empathy Focus, EF)を探す。

「意識焦点」「視点焦点」はそれぞれ次のように定義される。

(22) 「意識焦点」(Sentient Focus, SF)

指示対象が pro を含む POV 投射の意味内容を意識していると解釈される 1 つの項

「視点焦点」(Empathy Focus, EF)

話者が指示対象と視点を共有していると解釈される 1 つの項

「意識焦点」(SF)は、思考動詞、発言動詞、感情表現の主語、心理構文の「経験者」などが典型的であるが、文の意味的、語用論的要因からも間接的に決定される。「視点焦点」(EF)は Kuno and Kaburaki (1977), 久野 (1978, 第 2 章) などでそれを決定するさまざまな要因が論じられている。

4. 「視点」と「視点投射」

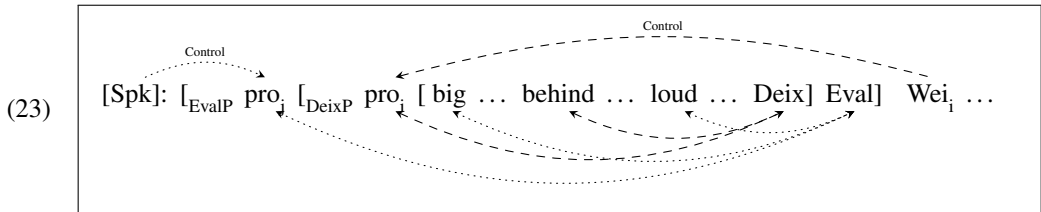
4.1. 「視点投射」と「一致」

前節で概観した「視点投射」と「一致」に基づく分析に従って、もう一度上の問題文(7), (9)を見てみよう。

(7) While the **big** man sitting **behind** was talking **loud**, Wei was fast asleep.

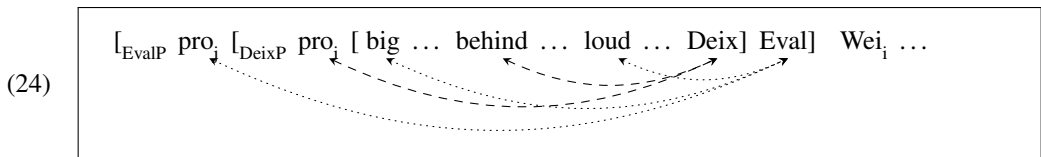
(9) That the **big** man sitting **behind** was talking **loud** intimidated Wei.

(7)の視点に関与する要素を含む構造と「一致」のパターンは次のように表示される。

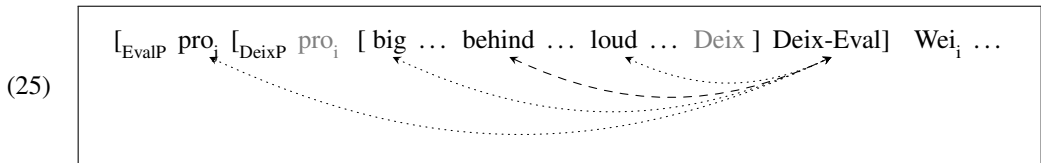


主観的評価を表す big, loud はともに「評価」投射 Eval と「一致」する。位置関係を表す behind は「ダイクシス」投射 Deix と「一致」する。眠っていて意識のない Wei は「ダイクシス」投射指定部の pro のコントローラとなる。「評価」投射指定部の pro については文中の登場人物にコントローラとなれる人がいないので、話者がコントローラとなる。このコントロールと「一致」の連鎖によって behind の視点保持者は Wei であり、big, loud のそれは話者となる。

次に(9)を考えてみよう。この文の構造と「一致」パターンは、まず次のように表示される。



このままでは、(7)のパターンと同じである。一方、この文の Wei は経験者 (Experiencer) の役割を持っており、(21)によって、ダイクシス投射指定部の pro のコントローラとなれない。しかし、ダイクシス主要部が主要部上昇によって評価主要部とマージすることによって behind の一致領域を広げることができる。



この主要部移動によって Deix が Eval とマージすることで、「経験者」である Wei が Deix-Eval の投射指定部の pro に対するコントローラとなる。これが「Wei から見て後ろ」

を表示していると考える。

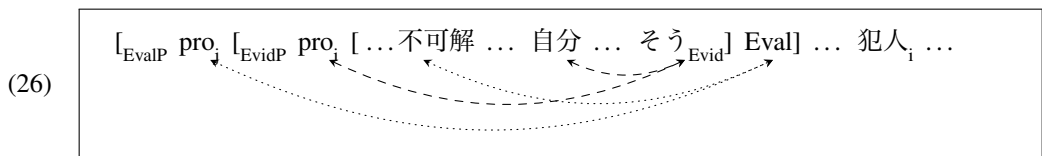
4.2. 「視点」と「最小性」

次に、(19)をもう一度考えてみよう。

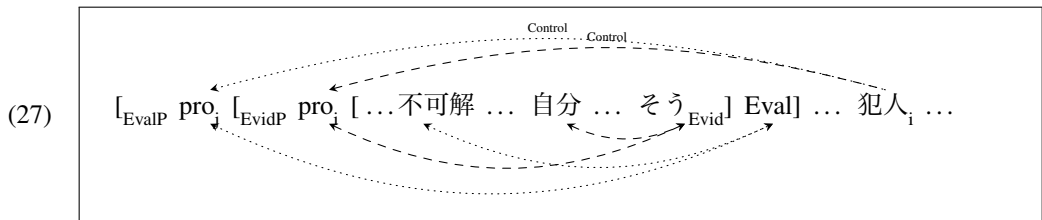
(19) 警察が [不可解にも] [自分_i] を見つけ出し [そう] なことが 犯人_i をいら立たせている。

この文の「自分」が「犯人」を指す解釈では「証拠性」を表す「～そう」もまた「犯人」の視点を表すものでなければならない。一方、「不可解」は「犯人」の視点を表す解釈が支配的であるものの、話者の視点を表す解釈も不可能ではないというのがわれわれの観察であった。

(19)の構造と「一致」は次のように表示される。

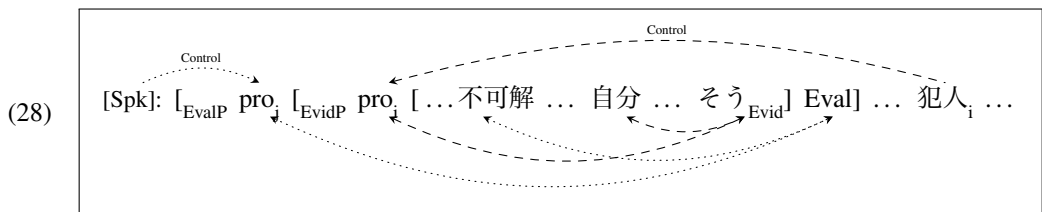


この構造で、「経験者」(Experiencer)である「犯人」が「評価」「証拠性」投射の指定部 pro をコントロールすることを阻むものはない。



これが「不可解」「自分」ともに「犯人」の視点を表す、この文の支配的な解釈を表示するものである。

「不可解」が話者の視点を表す解釈が不可能ではないことは、「評価」投射指定部の pro に対するコントローラに話者なることを阻むものはないことによって説明される。



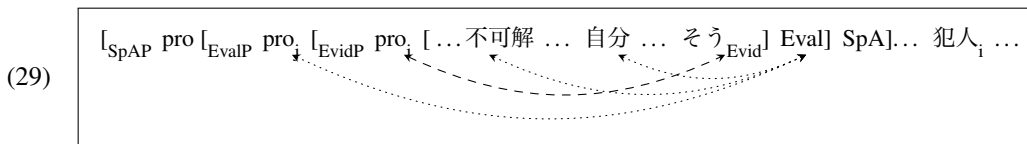
この解釈について、Sells (1987)の「談話役割」によるラベル付けではどういふ記述をすることになるのだろうか。「犯人」が「自己」であることは問題ないとして、「話者」の「談話役割」はどうなるのだろうか。「自己」であると考えるのがデフォルトであるが、それではひとつの文の中に2人の「自己」が存在することになる。これは「視点シフトの一貫性」(Shift-Together)に反するものである。

そこで残される可能性は、話者が「情報源」の談話役割を持つことである。これは「ロゴフォリック階層」(Logophoric Hierarchy)によって、上位の談話役割は下位の談話役割を兼ねることができる、この場合であれば「情報源」である話者が本来「自己」である談話役割を持つことができる というアイデアがあり、これと矛盾しない。

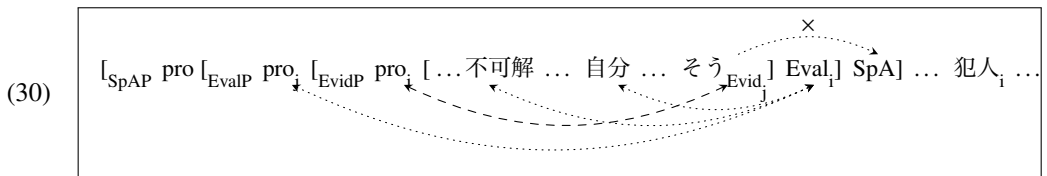
しかし、これでは、「自分」＝「犯人」である場合、「証拠性」の「そう」が「犯人」ではなく「話者」の視点を表す解釈が存在しないという事実を捉えることができない。「ロゴフォリック階層」によって、本来「自己」を指向する「そう」が本来「情報源」である話者の視点を表すことになる可能性を排除するものはないからである。

しかし、われわれの分析では、このような恣意的な解釈の可能性はシステムによって排除される。われわれの分析で「そう」が「話者」の視点を表す解釈を表示するためには、「そう」の範疇である「証拠性」投射が「発話行為」投射の位置に主要部移動することが必要である。これが起こるためには「証拠性」主要部が「評価」主要部を超えて移動しなければならない。しかし、われわれが仮定している解釈では、「不可解」が「犯人」の視点を表しており、それと一致する「評価」投射は話者が持ちうる指標と異なった指標を持っていると考えなければならない。

われわれの分析では、問題の解釈は次のような「一致」のパターンから始まらなければならない。



この構造では、「不可解」と「自分」が「評価」投射と「一致」の関係にある。「評価」投射指定部の pro は「犯人」によってコントロールされることで、これらが「犯人」の視点を表すことになる。ここで、証拠性「そう」が「話者」の視点を表す構造を得ようとすると、証拠性「そう」が主要部移動によって「言語行為」投射の位置へ動き、併合する必要がある。しかし、これが起こるためには証拠性「そう」が異なる指標を持つ「評価」投射を越えなければならない。



このような主要部移動は「最小性の原則」(the minimality principle (Rizzi 1990)) という統語的原則を違反することになる。つまり、(19)において「自分」と証拠性「そう」が「犯人」の視点を表し、「不可解」が「話者」の視点を表すという解釈は、あくまで周縁的だが不可能ではないのに対し、「不可解」「自分」が「犯人」の視点を表し、証拠性「そう」が「話者」の視点を表す解釈は、「談話役割」のラベル付けと「ロゴフォリック階層」にもとづく分析では排除する根拠がないと言わざるをえないのに対し、「視点投射」と「一

致」にもとづく本分析では、「最小性の原則」という統語的条件によって排除されるという際だった違いが見られるのである。

5. 「理由」 vs. 「原因」

西垣内 (2016, 7.4 節) で展開した「理由」を含む構造に見られる「視点」に関わる言語現象は、「視点シフト」のひとつのケーススタディである。この節では、西垣内 (2016, 7.4 節) の内容を発展させ、「視点」投射に基づく分析と西垣内 (2016) のいわゆる「非飽和名詞」を含む構文の分析が相互に関連しあう言語現象についての洞察を示し、その分析を提示したい。

5.1. 「理由」と「視点」

西垣内 (2016) は次のような「指定文」の構造と意味について分析している。¹

(31) 「体力の限界」が同力士が引退届を提出した (こと) の理由だ。

この文で用いられている「理由」は西山 (2003) が「非飽和名詞」と呼んでいる名詞のひとつである。西山 (2003) には「非飽和名詞」の明確な定義が与えられていないが、それに近いものが次に引用する部分である。

(32) パラメータを含んでいて、その値が具体的に定まらないかぎり、外延を定めることができないタイプの名詞 (西山 2003, 269)

「パラメータ」という不可解な概念をはじめ、問題の多い言明だが、次のよく用いられる例文に沿って言えば、直感的には「本場」という語は「非飽和名詞」のひとつであり、そのパラメータが「カキ料理」であり、それが定まらない限り「広島」という外延が定まらないという意図である。

(33) 広島がカキ料理の本場だ。

西垣内 (2016) は、このような「非飽和性」に基づく分析には問題があり、「非飽和名詞」と呼ばれているもののより重要な特性は、さまざまなタイプの言語表現で表される存在物の「関係」を表すものであると考え、その投射の中に2つの項がさまざまなタイプの言語表現として現れるものであるとして、その投射を「中核名詞句」と呼んだ。西垣内 (2017) では Nathan (2006) などに従って「中核名詞句」の主要部を「関係名詞」(Relational Noun) と呼んだ。² しかし、「関係名詞」という用語はすでに村田・長尾 (1997) など (まった

¹実際には、次のような三宅 (2011, 75) などで議論されている、いわゆる付帯条件を表す節が西垣内 (2016, 7.4 節) の議論の中心であるが、「視点」に関する問題点は同じであるので、「指定文」のみに言及して行くことにする。

(i) 「体力の限界」を理由に、同力士が引退届を提出した。

²西垣内 (2016, 143) では次のように書いた。

「中核名詞句」の主要部となるのは西山 (2003) が「非飽和名詞」と呼んでいる「本場」「主役」「作者」などが典型的だが、この種の名詞の特徴は、2つの項をとり、名詞句で表される「個体」だけではなく、「事象」などさまざまなタイプの言語表現の間の「関係」を表すところに重要なポイントがある。

く違う意味でとは言えないが) 使われている。Caponigro and Heller (2007) は Functional Noun という用語を用いており、その日本語訳「関数名詞」は特に先例がないようなので、今後「関数名詞」、その句レベルでの投射を「関数名詞句」と呼ぶことにする。³ここでもう一度確認しておくが、われわれの分析は「分類」(taxonomy) が目的ではなく、用語や名称は分析を進めて行く上でコミュニケーション上必要なだけのものである。

「(非) 飽和性」のひとつの看過できない問題は、特に分類 (taxonomy) を旨とする伝統的な日本語学では、ある名詞が「(非) 飽和」と分類されればそれ以上の考察が止まってしまうというところがある。もちろん必然性はないが、西山 (2003) を代表とする研究を見る限り、それを否定するような知見、洞察が示された例は見当たらない。⁴しかし、問題の名詞が2項をとり、さまざまなタイプの言語表現の間の「関係」を表すと考えれば、どのような表現とどのような表現の間の関係を表すのか、という問題意識が生じ、ここから「(非) 飽和性」にもとづくものとは次元の異なる考察が発展する可能性がある。

西垣内 (2016) の分析では、「理由」は事象と事象の関係を表す名詞と考え、(31) は次のような名詞句を中核として派生される。⁵

(34) [_{NP} 同力士が引退届を提出した (ことの) [_{N'} 「体力の限界」 (という) [_N 理由]]]

この「関数名詞句」の内項を焦点化することで (31) を派生することができる。しかし、「理由」を含む関係の構文には、事象と事象の関係という以上に微細な特性が見られる。まず、(31) の主節を受け身文にした (35a) は容認性が高いが、非対格構文の (35b)、ことからの存在・生起を表す (35c) は容認性が低い。

- (35) a. 「体力の限界」が同力士によって引退届が提出された (ことの) 理由だ。
 b. * 「体力の限界」が引退届が事務局に届いた (ことの) 理由だ。
 c. * 「体力の限界」が引退届の提出があった (ことの) 理由だ。

例文 (35b,c) に共通しているのは、主節の中に「行為者」のような特定の項が表現されていないことである。しかし、問題はそれだけではない。

(36) ?? 「体力の限界」が理事長が引退届を受理した (ことの) 理由だ。

例文 (36) は「理事長」を「行為者」と解釈できるが、奇妙に聞こえる文である。しいて

「非飽和名詞」の考え方と2項をとるという考え方は相容れるものではないし、この書き方が西垣内 (2016) の分析そのものを「非飽和性」に基づく考察のヴァリエーションにすぎないという印象を与えてしまったかも知れない。

³ ついでながら、「非飽和名詞」の句レベルでの投射は「非飽和名詞句」ではなく、「飽和名詞句」と呼ぶべきものになるのではないと思われる。一応その「定義」と思われる (32) では「パラメータを含み…」とあり、それが関係節をなしており、その主要部が「…タイプの名詞」で終わっているので、「x がパラメータを含む」の x は名詞だということになる。語彙レベルの名詞が句レベルの名詞句を含む (contain = dominate 「支配する」) というのは通常は許されないことなので、(32) が言おうとすることは「その句レベルでの投射がパラメータを含み…」と補って読まなければいけないと推測される。

⁴ ひとつの事例として注6を参照願いたい。

⁵ Higgins (1973, 136–138) は英語の 'reason' が2つの補文をとる数少ない名詞のひとつである旨の観察をしている。

(i) The reason {why/that} I left was that she wasn't feeling well. (Higgins 1973, 136, (26b))

解釈すれば、「体力の限界」が「理事長」の判断内容を表しているというものである。しかし、誰の「体力の限界」なのかがはっきりしないので、奇妙なひびきを持つことになると考えられる。「理事長」の判断内容と自然に解釈できる内容であれば、次のように容認性の高い例文を作ることができる。

(37) 書式の不備が理事長が引退届を棄却した（ことの）理由だ。

この観点から (31) をふり返ってみると、この文の「体力の限界」が引用を表す「」（カッコ）に入っているように、「体力の限界」は客観的な事象ではなく、「同力士」の（主観的）判断内容を表している。例文 (35b,c) の容認性が低いのは、この（主観的）判断を下す主体を表す項が欠けているためと考えることができる。

5.2. 「理由」 vs. 「原因」

「原因」も、「理由」と同じく「関数名詞」と考えられる。⁶しかし、この2つの名詞は「視点」について異なったふるまいを示す。まず、(31) の「理由」を「原因」に置き換えてみると、妙に感じられる文になる。

(38) ?? 「体力の限界」が同力士が引退届を提出した（ことの）原因だ。

「原因」は指定文の焦点（あるいは「値」となる表現が客観的な事象を表すことを要求すると考えられる。ここから、次のような対比が観察される。

(39) a. 六甲道駅での人身事故が神戸線の遅延の原因だ。

b.??六甲道駅での人身事故が神戸線の遅延の理由だ。

(39b) は、次のように「理由」節の中身を個人的な内容に変えると容認性が高まる。

(40) 六甲道駅での人身事故がタカシの遅刻の理由だ。

しかし、ここでの「人身事故」は客観的な事象というより、タカシの言い分、ないし言い訳と感じられる。

また、次の文の間には微妙な対比がある。

(41) a. 大学の不可解な人事が鈴木教授が辞職した（ことの）理由だ。

b. 大学の不可解な人事が鈴木教授が辞職した（ことの）原因だ。

これらの文の「不可解」が、誰の視点から見て不可解であるかという対比である。(41a) の「不可解」は「鈴木教授」の視点から不可解であり、(41b) の「不可解」は、「鈴木教授」の視点よりも、この文を発話した人、つまり（外的）話者の観点を表す解釈が支配的である。

英語の 'reason'/'cause' を含む構文でも同様の微妙な対比が見られる。

(42) a. The reason for Mary quitting the job was that the company had treated her unfairly.

b. The cause of Mary quitting the job was that the company had treated her unfairly.

⁶西川 (2013) には「原因」と「理由」に関する議論があるが、いわゆる「内の関係」「外の関係」という伝統的な見方で関係節との相違点を指摘し、「カキ料理構文」を作るからどちらも「非飽和名詞」であることを確認するにとどまっており、本分析とは関心の場所が異なっている。

(42a) の ‘unfairly’ は Mary の視点を表しているが、(42b) の同じ語は話者の視点を表す解釈が支配的である。⁷

実際に西垣内 (2016) の中で「理由」と対比して考察されたのは「きっかけ」である。意味の近い「契機」も同様にはたらくようだ。

(43) 大学の不可解な人事が鈴木教授が辞職した (ことの) {きっかけ / 契機}だ。

(43) の「不可解」は「鈴木教授」の視点、話者の視点いずれも可能である。西垣内 (2016, 注 33, 168) でも記したことだが、「きっかけ」の解釈については個人によって差異があり、(43) の「不可解」を「鈴木教授」の視点と読むのが支配的である話者と、(外的) 話者の視点ととるのが支配的とする話者に分かれるようである。

「きっかけ」を、この場合なら「鈴木教授」の「～が起これば～する」という「合図」のような意味で解釈すると、(43) の「不可解」を「鈴木教授」の視点とする解釈が強く出るようである。ここでは「きっかけ」自体が「鈴木教授」の視点を表すもので、その限りでは本分析の予測に合致するものである。

われわれの分析では、(41a) は「理由」を主要部とする名詞句を中核として派生され、その「関数名詞句」の内項に「評価」投射があらわれると考える。

(44) [_{NP} 鈴木教授_iが辞職した (ことの) [_{N'} [_{EvalP} pro_i [大学の不可解な人事] Eval_i] (という) [_N 理由]]]

この「関数名詞句」の中で、「不可解」が内項の「評価」主要部と「一致」し、「評価」投射指定部に pro が投射され、この pro が「関数名詞句」指定部にある節の主語である「鈴木教授」のコントロールを受ける。これによって「不可解」が「鈴木教授」と同一指標を持ち、後者の視点を表すものであることが表示に反映される。一方、(41b) の「不可解」が「鈴木教授」ではなく、話者の視点を表すことは、「原因」がその内項として「評価」投射の存在を好まないと考えることによって説明される。さらに「きっかけ」「契機」は「評価」投射を任意的に受け容れると考えられる。

「理由」「原因」「きっかけ」の間のこのような微妙な差異を捉えることは、与えられた名詞を「(非) 飽和名詞」と分類することを旨とする研究では視界にすら入らないことである。それに対し、われわれの分析ではこの差異を「理由」「原因」「きっかけ」という「関数名詞」がその内項を占める表現を統語的に選択するかどうかというポイントに帰される。

(45) 「理由」: *(EvalP) __; 「きっかけ」: (EvalP) __; 「原因」: *EvalP __

われわれの分析での「内項」は主要部とシスター関係にある、すなわち相互に c 統御する (かつての統語論の枠組みでは「語彙的統率」lexical government) 範疇であり、この意味での「内項」に関して主要部との選択関係チェックすることはごく自然なことであり、問題の名詞を「関数名詞」として捉えることから展開する分析は「非飽和性」に基づく考察の単なるヴァリエーションではないことを明確に示すもうひとつの議論である。⁸

⁷Thanks to Chris Kennedy for confirming this observation.

⁸実際に提案されてもいない分析を先回りして想定し、その想定された分析の問題点について批判する行為

また別の観点から述べると、「理由」「原因」「きっかけ」の間の意味的な相違を統語的な選択に帰すことができるためには、選択の対象となる統語範疇の側で「評価」や次の節で見る「証拠性」という「視点」に関する特性が可視化されていることが必要である。これは、統語的範疇としての「評価」「証拠性」投射の存在を支持する議論の根拠となるものである。

5.3. 「証拠性」投射

主観的判断を表すタイプの節としては、「評価」のほかに「証拠性」(Evidential)を表す節がある。動詞・形容詞の語根につく「そう」は「証拠性」を明示する助動詞である。

- (46) a. 雨がやみそうなことが審判が試合再開を宣言した理由だ。
b. *雨がやみそうなことが審判が試合再開を宣言した原因だ。

(46a)では「雨がやみそう」と審判が判断したと読むことができる。(46b)では主観的判断は原因の内容とはなれないので、文そのものの容認性が低い。

英語の‘reason’/‘cause’にも同様の対比が見られる。

- (47) a. The reason for the principal deciding to cancel the picnic was that a stormy weather was likely on the day.
b. ??The cause of the principal deciding to cancel the picnic was that a stormy weather was likely on the day.

‘Likely’が英語の「証拠性」を表している。(47b)は(46b)ほど悪くないようだが、(47a)ではlikelyの「経験者」(Experiencer)がthe principalでなければならない(likely to the principal)のに対し、(47b)ではlikelyが客観的な見通し、あるいは話者の意見を表していると読まなければならない。

Tenny (2006)は日本語の形容詞「寒い」や願望文「水が飲みたい」など個人の直接経験(direct experience)を表す述語について平叙文では1人称、疑問文では2人称に限定されることを述べている。

- (48) a. {私は/*君は/*彼は}{寒いです。/水が飲みたいです。}
b. {君は/*私は/*彼は}{寒いですか? /水が飲みたいです?}

その上で、Tenny (2006)は「証拠性」の文脈ではこの人称制限が解除されることを観察している。「証拠性」を表す「そう」「がる」という助動詞のつく節では3人称の主語が

を「藁人形論法」(strawman argument)と呼び、そのような行為と疑われる書き方をするのは極めて本意だが、「(非)飽和性」に基づく分析で考えられるのは、次のような「変項名詞句」を用いるのではないと思われる。

- [不可解な人事] [[x が教授が辞任した] {理由/原因}だ]
(i) ↙(指定する)↘

そもそも「変項名詞句」というものがどのような性質というか素性(すじょう)を持つものがわからない(統語構造でないことははっきりしているし、意味論の表示とも無縁である)が、この中で「理由」が選ばれればxがわれわれの「評価」投射に相当するものでなければならない、「原因」が選ばれればxは「評価」投射に相当するものであってはならないという洞察に、どのような経路でつながって行くのか、私の想像力ではまったく見えない。

可能となる。

- (49) a. 彼は {寒そうだ。/水が飲みたそうだ。}
 b. 彼は {寒がっている。/水を飲みたがっている。}

この観点から次の例文を見てみよう。

- (50) a. 大学院に行きたいことがマキが仕事をやめた理由だ。
 b.??大学院に行きたいことがマキが仕事をやめた原因だ。

(50a)では、指定文の焦点(値)となる節に直接経験を表す表現が現れている。これはこの節がもともと「証拠性」を組み込んでいることを示す証拠と考えられる。このことは、「理由」がその語彙的特性として「証拠性」投射を選択すると考えれば、自然なことと考えられる。語彙的选择が行われるのは主要部とその内項、すなわち主要部と相互にc統御する範疇であると考えられることも、自然なことである。

- (51) [_{NP}マキが仕事をやめた(ことの) [_{N'}[_{EvidP}pro_i [大学院に行きたい] Evid_i] (という) [_N理由]]]

「理由」vs.「原因」の間の差異は、次の「自分」解釈の容認性の差異にも現れる。

- (52) a. すべてのメディアが自分_iを批判したことが首相_iが退陣した理由だ。
 b.??すべてのメディアが自分_iを批判したことが首相_iが退陣した原因だ。

視点に関する制限のない代名詞「彼」を用いた次の文は、(52b)より容認性が高まる。

- (53) すべてのメディアが彼_iを批判したことが首相_iが退陣した原因だ。

(53)の容認性が低いことは、(52b)がひとえに「自分」の解釈に関連して容認性が低いことを示す、重要な事実である。また、(52b)は「証拠性」投射のないところでは「意識焦点」を先行詞とする「自分」の解釈ができないことを示しており、Nishigauchi (2014a)、西垣内 (2014b)の分析の妥当性に対するさらなる証拠を提供している。

われわれの分析では、(52a)は次の「関数名詞句」が派生の中核となる。

- (54) [_{NP}首相_iが退陣した(ことの) [_{N'}[_{EvidP}pro_i [メディアが自分_iを批判した] Evid_i] (という) [_N理由]]]

「自分」は、(20)に従って、Evid 主要部と「一致」の関係を持つ。EvidP 指定部の pro も Evid 主要部と「一致」し、その結果 pro が「自分」を「束縛」することになる。さらに EvidP 指定部の pro はそのコントローラとして(21)に従って「意識性」を持つと解釈される項を探す。(52a)では、(54)の指定部を占める節の主語「首相」がそれに相当し、これが示されている解釈となる。同じ節に「首相」の意志では制御できない事態を表す述語を使うと、「首相」は「意識焦点」でなくなり、同じ解釈での容認性が下がることは、この線に沿った考察が正しい方向を指していることを確認するものである。

- (55)??すべてのメディアが自分_iを批判したことが首相_iが失脚した理由だ。

一方、「原因」を含む(52b)の「自分」解釈の容認性が低いことは、(50b)の容認性が低いことと対応している。いずれも「原因」の内項の位置に「証拠性」投射が選択されないことから起こる帰結である。(50b)では、その選択上の理由から「証拠性」が投射されない。そのため「自分」が「一致」の関係を持つ相手が得られないということである。

6. おわりに

本論文では Sells (1987) のいわゆる「主観表現」に関わる分析に関連し、Nishigauchi (2014a), 西垣内 (2014b) による「視点投射」(POV-projections)を含む統語構造の観点からの分析を提示した。本論文の分析では下位の視点投射が上位の視点投射の位置へ主要部移動し、それによって下位の視点投射の「一致」領域が広がることによって捉えられる言語現象を示した。さらに、「理由」「原因」という従来「非飽和名詞」と呼ばれているものを含む構文の中で見られる「視点」現象を考察し、「理由」「原因」などを「関係を表す名詞」と考えることで、まったく次元の異なる分析の展望が開けることを示した。

参考文献

- Bylinina, Lisa, Eric McCready and Yasutada Sudo (2014) The landscape of perspective shifting. Conference handout, Symposium on Pronouns in Embedded Contexts at the Syntax-Semantics Interface, Tübingen.
- Caponigro, Ivano and Daphna Heller (2007) The non-concealed nature of free relatives: Implications for connectivity in specificational sentences. In: Barker, Chris and Pauline Jacobson (eds.) *Direct compositionality*: 237–263: Oxford University Press.
- Charnavel, Isabelle Carole and Christina Diane Zlogar (2015) English reflexive logophors. *Proceedings of the 51st annual meeting of the Chicago Linguistic Society (CLS51)*.
- Higgins, Francis Roger (1973) The pseudo-cleft construction in English. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館, 東京.
- Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki (1977) Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry* 8: 627–672.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版, 東京.
- 村田真樹・長尾真 (1997) 「意味的制約を用いた日本語名詞における間接照応解析」『自然言語処理』4 (2): 41–56.
- Nathan, Lance Edward (2006) On the interpretation of concealed questions. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Nishigauchi, Taisuke (2014a) Reflexive binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23: 157–206, 5.
- 西垣内泰介 (2014b) 「エンパシーと阻止効果」『言語研究』146: 109–133.
- 西垣内泰介 (2016) 「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』150: 137–171.
- 西垣内泰介 (2017) 「潜伏疑問の統語構造 (What is behind the Concealed Question)」, 日本英語学会シンポジウム『意味と統語構造のインタフェース』口頭発表.
- 西川賢哉 (2013) 「非飽和名詞を主名詞とする連体修飾節構造の意味表示」西山佑司 (編) 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』: 29–50. 東京: ひつじ書房.

- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』 東京：ひつじ書房.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized minimality*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Sells, Peter (1987) Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18: 445-479.
- Speas, Margaret (2004) Evidentiality, logophoricity and the syntactic representation of pragmatic features. *Lingua* 114.3: 255-276.
- 田窪行則 (2010) 『日本語の構造—推論と知識管理—』 東京：くろしお出版.
- Tenny, Carol L. (2006) Evidentiality, Experiencers, and the Syntax of Sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 245-288.
- Zribi-Hertz, Anne (1989) Anaphor binding and narrative point of view: English reflexive pronouns in sentence and discourse. *Language*: 695-727.

Author's web site: <http://banjo.shoin.ac.jp/~gauchi/>

(受付日: 2018 年 1 月 10 日)